

第2学年国語科学習指導案

日 時：平成 26 年 11 月 12 日(水)

場 所：2 年 1 組教室

授業者：野原 とみ

1. 単元名 音読げきをしよう

教材名 『お手紙』

2. 指導の立場

(1) 教材観

「お手紙」は、がまくんとかえるくん、性格の異なる二人が共にお手紙を待つ行為を通して、互いの心を通わせていく心の交流を描いた作品である。物語は二人の会話を中心に展開され、そのやりとりを通して、二人の様子や心情を読み取ることができる。子どもたちも、親しみのもてる二人の登場人物に寄り添い、共に悲しんだり喜んだりして物語の世界に浸ることができるであろう。

子どもたちはこれまで、「ふきのとう」の学習において、場面の様子について人物の様子や会話を中心に想像を広げながら読み、役に分かれて音読することを、また、「スイミー」の学習では、人物の行動や場面の様子の変化について想像を広げながら読み、心に残った場面を紙しばいに表して感想を伝えることを学習してきた。

そこで、本単元ではこれまでの学習を生かし、場面の様子について登場人物の行動や会話を中心に想像を広げながら読み、読み取った場面や人物の様子・気持ちについて自分の思いや考えをまとめ、伝え合うことができるようにする。これらの力を身に付けるために、単元の出口に「音読げきに表して楽しむ」言語活動を位置付ける。音読劇に表すために、子どもたちはがまくんやかえるくんになりきって音読したり動作化したりしながら、二人の様子や心情を豊かに想像しながら読み進めることができ、また、「音読劇に表したい」という目的意識のもと、主体的に学習に取り組むことができると考える。

(2) 研究との関わり

【児童の実態】

- ・「ふきのとう」や「スイミー」の学習で、登場人物のしたことや言ったことをもとに、動作化や役割音読を通して、場面の様子について想像を広げながら読むことができるようになってきている。しかし、想像した人物の様子や気持ちを発表したり吹き出しに書き表したりすると、本文の表現をそのまま引用してしまう児童が多くいる。
- ・自分の思いや考えを発表することに慣れてきたので、挙手発言する児童は増えた。しかし、自分の思いを長い文で話せる児童は少なく、単語や短いセンテンスの文でしか話せない児童や、友達と同じ意見を繰り返す児童が半数程いる。また、仲間の意見につなげて話すことが苦手な児童が多い。
- ・すらすらと音読できるようになるまでに時間がかかる子が2人いるが、単元の最後には教材文をほとんどの児童が覚えてしまう。

研究内容 1

- (1) 付けたい力を明確にし、単元を貫く言語活動を設定する。

付けたい力

- ・場面の様子について、登場人物の行動や会話を中心に想像を広げながら読む力。
 - ・読み取ったことをもとに自分の考えをもち、表現する力。
- 単元を貫く言語活動の設定
- ・「音読劇に表す」活動を単元の出口に設定し、児童が目的をもって想像を広げながら読み進められるようにする。毎時間のまとめで、場面ごとのがまくんとかえるくんの様子や気持ちをどのように音読したいかを考えることで、「音読劇に表す」出口の活動へとつなげたい。

研究内容 2

- (1) 自分の考えを確かなもつための手立てを工夫する。
- ・「したこと」と「言ったこと(会話文)」に着目させる。教材文のほとんどが会話文であるため、「したこと」ははじめにみんなで確認し、一人読みでは、会話文からがまくんやかえるくんの様子や気持ちを想像させるようにする。会話文のどこから様子や気持ちが分かるか、会話文全体でなく語尾に目を向けられるようにしたい。
- (2) 考えを広げ、深めるための効果的な交流活動を工夫する。
- ・役割音読や動作化を通して、登場人物の様子や気持ちを読み深めさせたい。また、深めの発問をすることで、全員が共通の問題として思考する場を創り出したい。

【めざす児童の姿】

- ・登場人物の行動や会話から想像を豊かに広げ、読み取った様子や気持ちを自分の言葉で表現することができる。
- ・自分の思いや考えを、自分なりの言葉で発表することができる。
- ・登場人物の行動や気持ちに対する自分の思いを明らかにし、音読の仕方や動きを工夫することができる。

3. 本時のねらい

二人の会話文に着目することを通して、がまくんにお手紙を待ってもらうために思わず自分が手紙を出したことを打ち明けてしまうかえろくんと、手紙の内容に喜ぶがまくんの様子や気持ちを読み取り、とても喜んでいるがまくんの気持ちがわかるように音読劇の表し方を工夫することができる。

4. 本時の展開 (6 / 12)

	学習活動	個に応じた指導・援助 交流の形態 評価規準
つかむ	1. 前時の場面を振り返る。 ・手紙を待つのが嫌になり、すねて投げやりになっているがまくんの様子を思い出す。 ・早く手紙が届いてほしい、あきらめないで手紙を待つようがまくんを励ますかえろくんの様子を思い出す。 2. かえろくんとがまくんのしたことを確かめ、課題をつかむ。 お手紙をまちつづけるかえろくんと、お手紙の話を聞いたがまくんのようすや気持ちもそうぞうし、音読げきのしかたをくふうしよう。	・挿絵としたことの描写から、場面の様子を確認する A：かえろくんやがまくんの様子や気持ちを考えて音読の工夫をしている児童に対して ・どうして、その読み方をしているのかわけを確認する。 ・更にその言葉から読み取れる気持ちを考えさせる。
考えをもつ	3. 役割音読をする。 4. 工夫して音読したいところに線を引き、かえろくんとがまくんの様子や気持ちを想像する。(一人読み) 5. 読み取ったことを交流する。(全体交流)	B：読み方と場面の様子や気持ちにズレがある児童に対して ・これまでの学習の足跡や自分のノートから、どのように読むとよいか考えさせる。 ・本時の3 - (2) 場面と3 - (1) 場面の挿絵を比較し、がまくんの表情などの違いに着目させ、考えさせる。
深める	がまくん ○「でも、来やしないよ。」 ・来ないよ。また、いつもと同じだよ。(怒っているように) ・どうしてそんなに窓の外ばかり見ているんだい。(不思議そうに。) ○「きみが。」 「お手紙になんて書いたの。」 ・どうして。(驚いたように) ・ぼくのために書いてくれたの。 ・早く知りたいよ。 (楽しみというように。) ・本当に書いてくれたの。 ○「ああ。」 「とても いいお手紙だ。」 ・かえろくんが大切な友だちと思っ - ていてくれている。 (嬉しいなというように。) ・「親友」なんてうれしいよ。 ・とても感動したよ。 ・ぼくには、「親友」がいるんだ。 かえろくん ○「きっと来るよ。」 ・絶対来るよ。 (きっぱりと) ・かたつむりくんは「すぐやる。」と言ったのに遅いな。 ○「だって、ぼくが、きみにお手紙を出したんだもの。」 ・ぼくが書いたから来るに決まってる。 (「しまった。言ってしまった。」というように。) ○「親愛なる」 「きみの親友」 ・本当に大切な友だちだよ。(「ずっと、友だちだよ。」という気持ちで。) ・書いてよかったなあ。	【深めの発問の意図】 何度も読むことで、自分のことを親友と言ってもらえたことにとっても感激し、とても幸せながまくんの様子を理解できるようにする。
まとめる	【深めの発問】(ペア交流) 「ああ。いいお手紙だ。」をがまくんになりきって読んでみよう。 ・温かい気持ちだったよ。 ・大事に思っていてくれるんだな。 ・「ぼくの親友」なんてうれしいよ。 6. がまくんやかえろくんの気持ちをまとめる。 がまくんは、かえろくんに、「親友」と言ってもらえてとてもしあわせな気持ちになった。 7. 音読をするための工夫を書き込む。 8. まとめの音読劇をする。	ペア交流 ・かえろくんのお手紙に感激し、とても幸せな気持ちが表れるように互いにアドバイスをし合うことで、音読の工夫につなげる。 お手紙を待ってほしいかえろくんとお手紙の内容を喜んでいるがまくんの様子や気持ちを読み取り、音読や動きに表している。 【ノート・音読】

第2学年国語科学習指導案

日 時：平成 26 年 11 月 12 日（水）

場 所：食堂

授業者：木下 香居

1. 単元名 音読げきをしよう
教材名 『お手紙』

2. 指導の立場

(1) 教材観

「お手紙」は、がまくんとかえるくん、性格の異なる二人が共にお手紙を待つ行為を通して、互いの心を通わせていく心の交流を描いた作品である。物語は二人の会話を中心に展開され、そのやりとりを通して、二人の様子や心情を読み取ることができる。子どもたちも、親しみのもてる二人の登場人物に寄り添い、共に悲しんだり喜んだりして物語の世界に浸ることができるであろう。

子どもたちはこれまでに、「ふきのとう」の学習において、場面の様子について人物の様子や会話を中心に想像を広げながら読み、役に分かれて音読することを、また、「スイミー」の学習では、人物の行動や場面の様子の変化について想像を広げながら読み、心に残った場面を紙しばいに表して感想を伝えることを学習してきた。

そこで、本単元ではこれまでの学習を生かし、場面の様子について登場人物の行動や会話を中心に想像を広げながら読み、読み取った場面や人物の様子・気持ちについて自分の思いや考えをまとめ、伝え合うことができるようにする。これらの力を身に付けるために、単元の出口に「音読げきに表して楽しむ」言語活動を位置付ける。音読劇に表すために、子どもたちはがまくんやかえるくんになりきって音読したり動作化したりしながら、二人の様子や心情を豊かに想像して読み進めることができると考える。また、「音読劇に表したい」という目的意識のもと、主体的に学習に取り組むこともねらいとしている。

(2) 研究との関わり

【児童の実態】

- ・「ふきのとう」や「スイミー」の学習で、登場人物のしたことや言ったことをもとに、動作化や役割音読を通して、場面の様子について想像を広げながら読むことができるようになってきている。しかし、想像した人物の様子や気持ちを発表したり吹き出しに書き表したりすると、本文の表現をそのまま引用してしまいう児童が半数ほどいる。また反対に、本文の表現を脱して想像を広げ過ぎる児童も数名いる。
- ・自分の思いや考えを進んで発表しようという意識が高まり、仲間の意見につなげて話すこともできるようになりつつある。しかし、自分の思いを息の長い文で話せる児童は少なく、単語や短いセンテンスの文でしか話せない児童や、友達と同じ意見を繰り返し発表する児童が半数程である。
- ・文字に対する抵抗の大きい児童が数名おり、すらすらと音読できるようになるまでに時間がかかるが、音読することは大好きである。単元の最後には教材文を覚えてしまう児童がほとんどである。

研究内容 1

(1) 付けたい力を明確にし、単元を貫く言語活動を設定する。

付けたい力

- ・場面の様子について、登場人物の行動や会話を中心に想像を広げながら読む力。

- ・読み取ったことをもとに自分の考えをもち、表現する力。

単元を貫く言語活動の設定

- ・「音読劇に表す」活動を単元の出口に設定し、児童が目的をもって想像を広げながら読み進められるようにする。毎時間のまとめで、場面ごとのがまくんとかえるくんの様子や気持ちをどのように音読したいかを考えることで、「音読劇に表す」出口の活動へとつなげたい。

研究内容 2

(1) 自分の考えを確かにもつための手立てを工夫をする。

- ・単元の出口に設定した『なりきり音読劇発表会』に向けて、第2次の毎時間の読み取りでも音読劇への表し方を工夫しながら学習を進めてきている。本時は、これまでの学習をもとにしながら、さらに動きや表情、体の向きや二人の距離感なども考えて音読劇の表し方を工夫できるようにしたい。そのために、グループ同士で見合ったり、これまでの一人読みのノートを振り返ったりしながら音読劇の視点を明らかにすることで、自分なりに音読劇の表し方を試行錯誤できると考える。

【めざす児童の姿】

- ・登場人物の行動や会話から想像を豊かに広げ、読み取った様子や気持ちを自分の言葉で表現することができる。
- ・自分の思いや考えを、自分なりの言葉で発表することができる。
- ・登場人物の行動や気持ちに対する自分の思いを明らかにし、音読の仕方や動きを工夫することができる。

3. 本時のねらい

自分が選んだ場面のがまくんとかえるくんの様子や気持ちが表れるように、音読の仕方や動き、表情を工夫して、音読劇の表し方を考えることができる。

4. 本時の展開 (9 / 1 2)

	学習活動	個に応じた指導・援助 交流の形態 評価規準
つかむ	1. 全体の課題を確認し、個人課題をもつ。 がまくんやかえるくんになりきって、音読げきのれんしゅうをしよう。 ○「なりきる」には、どうするとよいか、考える。 ・わたしは、3 場面の 2 を音読します。 がまくんが手紙の内容を聞いて、とても感動している様子がよく表れるように音読したいです。 2. 音読の仕方や動きを考える。(一人読み) ○がまくんやかえるくんのどんな様子や気持ちを表したいか、これまでの学習を振り返る。 ○どこをどんなふうに読むといいか(声の大きさやスピードなど)どんな動きや表情をつけるか、本文に音読の工夫を書きこむ。	A: 場面の様子や気持ちを考えて音読や動きの工夫をしている児童に対して ・どうしてその読み方や動きをしているのか、わけを確認する。 ・他の読み方や動き方もやってみて、一番よく表れる読み方や動きを選ぶように助言する。 B: 読み方と場面の様子や気持ちにズレがある児童に対して ・これまでの学習の足跡や自分のノートで、がまくんやかえるくんの様子や気持ちを思い出させる。 ・その様子や気持ちを表すためにはどう読んだりという動きをつけたりするとよいか考えさせる。
考えをもつ	3. グループで音読劇の練習をする。(仲間読み) ○がまくん、かえるくん、地の文に分かれて音読する。 ○それぞれの位置や顔の向き、表情や動きなどを確認しながら音読する。 【深めの発問】 ～グループの音読げきを見てみましょう。「なりきっているなあ」と思うところはどこですか？ また、「もっとこうするとよい」と思うところはどこですか？ ・～のところを、とても小さな声で悲しそうに読んでいたので、がまくんの手紙をまっているときの悲しみがよく表れていると思いました。ぼくも、がまくんやかえるくんの気もちをもっとこめたいと思いました。 ・～のところで、かえるくんとがまくんのふしあわせそうな気もちがあまり伝わってこないの、もう少ししょんぼりしたひょうじょうをくふうしてみるとよいと思います。	【深めの発問の意図】 代表グループの音読劇を見て、よいところとさらに工夫するとよいところを話し合い、「なりきる」ために気を付けるとよいことを再確認することで、自分たちの音読劇をさらに高めようという意欲を高める。
深める	○自分たちの音読劇で、さらに工夫するとよいところを見つけ、音読げきの練習を続ける。 4. まとめの音読劇を発表する。	全体交流 よさを認め合ったり、互いにアドバイスをし合ったりすることで、さらなる音読劇の工夫につなげる。
まとめる	わたしは、がまくんがお手紙のないように聞いて、かんどうしてよるこんでいるようすやうれしい気もちがあらわれるように音読します。そのために、顔のひょうじょうやこえのかんじをくふうしました。 ぼくは、かえるくんががまんしきれなくなったようすや気もちがあらわれるように音読します。そのために、少し言い方を強くして、おこったようなひょうじょうで読みます。 ぼくは、二人の気持ちがよく表れるように、間のあけ方をよく考えて音読します。	がまくんやかえるくんの様子や気持ちが表れるように、音読や動きを工夫している。 【発言・音読】

第2学年国語科学習指導案

日 時：平成 26 年 11 月 12 日（水）

場 所：2 年 3 組教室

授業者：若井 千里

1. 単元名 音読げきをしよう

教材名 『お手紙』

2. 指導の立場

(1) 教材観

「お手紙」は、がまくんとかえるくん、性格の異なる二人が共にお手紙を待つ行為を通して、互いの心を通わせていく心の交流を描いた作品である。物語は二人の会話を中心に展開され、そのやりとりを通して、二人の様子や心情を読み取ることができる。子どもたちも、親しみのもてる二人の登場人物に寄り添い、共に悲しんだり喜んだりして物語の世界に浸ることができるであろう。

子どもたちはこれまで、「ふきのとう」の学習において、場面の様子について人物の様子や会話を中心に想像を広げながら読み、役に分かれて音読することを、また、「スイミー」の学習では、人物の行動や場面の様子の変化について想像を広げながら読み、心に残った場面を紙しばいに表して感想を伝えることを学習してきた。

そこで、本単元ではこれまでの学習を生かし、場面の様子について登場人物の行動や会話を中心に想像を広げながら読み、読み取った場面や人物の様子・気持ちについて自分の思いや考えをまとめ、伝え合うことができるようにする。これらの力を身に付けるために、単元の出口に「音読げきに表して楽しむ」言語活動を位置付ける。音読劇に表すために、子どもたちはがまくんやかえるくんになりきって音読したり動作化したりしながら、二人の様子や心情を豊かに想像しながら読み進めることができ、また、「音読劇に表したい」という目的意識のもと、主体的に学習に取り組むことができると考える。

(2) 研究との関わり

【児童の実態】

- ・「ふきのとう」や「スイミー」の学習から、場面の様子を理解し、登場人物の行動や会話を正しくとらえることができる児童は増えてきたものの、それらをもとに場面の様子について想像を広げながら読むことができる児童は3割ほどである。一方、人物の様子や気持ちを表現しようとすると、本文の表現をそのまま引用するだけであったり、本文の表現から逸脱して想像を広げてしまったりする児童が多数いる。
- ・自分の思いや考えを仲間の意見につなげて話そうとする児童が増えてきた。しかし、自分の思いを豊かな表現で話せる児童は少なく、短い文でしか話せない児童や、友達と同じ意見をオウム返しのように発表する児童が半数程である。
- ・すらすらと音読できるようになるまでに時間がかかるが、単元の最後には教材文を覚えてしまう児童がほとんどである。

研究内容 1

- (1) 付けたい力を明確にし、単元を貫く言語活動を設定する。

付けたい力

- ・場面の様子について、登場人物の行動や会話を中心に想像を広げながら読む力。
 - ・読み取ったことをもとに自分の考えをもち、表現する力。
- 単元を貫く言語活動の設定
- ・「音読劇に表す」活動を単元の出口に設定し、児童が目的をもって想像を広げながら読み進められるようにする。毎時間のまとめで、場面ごとのがまくんとかえるくんの様子や気持ちをどのように音読したいかを考えることで、「音読劇に表す」出口の活動へとつなげたい。

研究内容 2

- (1) 自分の考えを確かにもつための手立てを工夫する。
- ・「したこと」と「言ったこと（会話文）」に着目させる。教材文のほとんどが会話文であるため、「したこと」は毎時間のはじめにみんなで確認し、一人読みでは、読み方の工夫したい部分を考えさせ、その読み方に関わらせてかえるくんやがまくんの気持ちを想像させるようにする。また、会話文だけでなく、全体の描写に目を向けられるようにしていきたい。
- (2) 考えを広げ、深めるための効果的な交流活動を工夫する。
- ・役割音読を通して、登場人物の様子や気持ちを読み深めさせたい。また、深めの発問で動作化を取り入れることで、全員が登場人物の気持ちに寄り添い思考する場を創り出したい。

【めざす児童の姿】

- ・登場人物の行動や会話から想像を豊かに広げ、読み取った様子や気持ちを自分の言葉で表現することができる。
- ・自分の思いや考えを、自分なりの言葉で発表することができる。
- ・登場人物の行動や気持ちに対する自分の思いを明らかにし、音読の仕方や動きを工夫することができる。

3. 本時のねらい

二人の挿絵や会話文に着目することを通して、手紙を待つよう励ますかえるくんと、すねて投げやりになっているがまくんの対照的な様子に気づき、音読劇の表し方を工夫することができる。

4. 本時の展開 (5 / 1 2)

	学習活動	個に応じた指導・援助 交流の形態 評価規準
つかむ	1. 前時の場面を振り返る。 2. かえるくんとがまくんのしたことを確かめ、課題をつかむ。 お昼ねをするがまくんと、手紙をまつかえるくんのようすや気持ちをそうぞうし、音読げきのしかたをくふうしよう。 3. 役割音読をする。 4. 工夫して音読したいところに線を引き、かえるくんとがまくんの様子や気持ちを想像する。(一人読み) 5. 読み取ったことを交流する。(全体交流)	・がまくんは「ベッドでお昼ね」、かえるくんは「まどからゆうびんうけを見」ながら、会話をしていることを確認する。
考えをもつ	かえるくん ○「もうちょっとまってみたいといいと思うな。」 ・もうちょっと待ったら、絶対にくるから、待ってほしいという気持ちをこめて。 ○「ひょっとして、だれかが～かもしれないだろう。」 ・起きて待っていてほしいから、誘うような気持ちで。 ・もう少し待ってみようよという気持ちを込めて ○「きょうは、だれかが、…かもしれないよ。」 ・あきらめないでという気持ちを込めて。 ・僕が出したから、きっと来るという強い気持ちで。 がまくん ○「あきあきしたよ。」 ・待っていてもなかなか来ないので面倒くさそうに。まちくたびれている。 ○「そんなこと、あるものかい。」 ・絶対に来るはずがないと、怒ったように。 ・今まで一度も来たことがないから、すねているように。 ○「ばからしいこと、～。」 ・「今まで～だぜ。きょうだって同じだろうよ。」 ・絶対にあるはずがないと、あきれたように。 ・来ないに決まっていると、すねたように。	- A: 文から様子や気持ちを考えて音読の工夫をしている児童に対して ・なぜ、その読み方をしているのか考えさせ、気持ちを想像させる。 ・さらに、会話の前後のつながりを考えさせ、音読の工夫を考えさせる。 - B: 読み方と場面の様子や気持ちにズレがある児童に対して ・これまでの学習の足跡や自分のノートで、どのように読むとよいか考えさせる。 ・挿絵をもとに、がまくんとかえるくんの表情の違いを考えさせる。
深める	【深めの発問】 かえるくんになりきって、窓の外を見てみよう。(動作化) ・「見ました。」と違い、「のぞきました。」は、身を乗り出してのぞいている。 ↓ ・手紙が待ち遠しく早く来ないかなとそわそわしているから。 ・かたつむりくんがなかなかこないの、心配していたから。 ・がまくんに、もう少し手紙を待ってみてほしいから。	- 全体交流 - 役割音読を取り入れながら、読み方の工夫についてどんなふうに表すとよいかを交流する。
まとめる	6. がまくんとかえるくんの様子や気持ちをまとめる。 かえるくんは、がまくんにもうすこし手紙をまってほしいと思い、なんどもまつことをさそっているが、がまくんは、今までとどかない手紙にすねて投げやりになっている。 7. 音読劇をするための工夫を書き込む。 8. まとめの音読をする。	【深めの発問の意図】 動作化を通して、何度も窓から郵便受けをのぞくかえるくんの様子を想像させることで、手紙を待ちわびる気持ちが強くなっていることを掴ませたい。 - 対照的な二人の様子や気持ちを読み取り、音読や動きに表している。 【ノート・音読】

単元指導計画

【スイミー】

人物の行動や場面の様子などについて、想像を広げながら読み、感想をもつことができる。

<言葉見つけの視点>

- ・したこと
- ・見たもの
- ・言ったこと

<読み取りの技>

- ・役割演技
- ・前の場面と比べて

【お手紙】

登場人物の行動や会話を中心に想像を広げながら読み、人物同士の関わりや心情の動きを感じ取ることができる。

【読（１）ウ】

- 自分の思いや考えをもち、音読劇に表して発表し合うことができる。

【読（１）オ】

<言葉見つけの視点>

- ・挿絵
- ・くりかえし言葉
- ・会話文の終わりの言葉（文末表現）

<読み取りの技>

- ・役割音読
- ・前の場面と比べて
- ・登場人物の対比

【わたしはおねえさん】

登場人物の行動や様子を中心に想像を広げながら読み、人物の心情の変化に気付くとともに、自分の経験と結び付けて、感想をもつことができる。

<言葉見つけの視点>

- ・気持ちを表す言葉
- ・様子を表す言葉

<読み取りの技>

- ・自分と比べて

次	時	ねらい	学習活動	着目する語句、表現	指導の手立て 評価規準
1次（見通しをもつ過程）	1	・ 範読を聞いて感想をもち、単元を通した学習のめあてをもつことができる。	1. 題名から、内容を想像する。 どんなお話かそうぞうしながら聞き、かんじたことを書いたり話したりしよう。 2. 教師の範読を聞く。 3. 初発の感想を書く。 4. 感想を交流する。 5. これからの学習の見通しをもつ。 かえるくんとがまくんのようすや気持ちを、音読げきに表してたのしもう。（『なりきり音読げき発表会』をしよう。）	☐ お手紙 ☐ アーノルド＝ローベル ☐ がまくん ☐ かえるくん ☐ 音読げき ☐ 会話文	・ 単元名とリード文を確認し、これまでの単元と比較し、学習課題について考えることができるようにする。 話を読んで感想をもち、音読劇への興味・関心をもっている。 【観察・ノート】
	2	・ 音読劇発表会に向けて、どんな活動をするかよいかを考え、学習への意欲と見通しをもつことができる。 ・ 挿絵や文章に注意して読み、場面分けや会話の区別をすることができる。	1. 本時の課題を確認する。 『なりきり音読げきはっぴょう会』にむけて、学しゅうのけいかくを立てよう。 2. 音読劇発表会までの学習計画を話し合う。 3. 場面分けをする。 4. 全文を音読する。 ・ かえるくんとがまくん、どちらの会話かはっきりさせる。 ・ 読み方や意味の分からない言葉を確認する。	☐ 場面 ☐ 挿絵	・ 「スイミー」の学習を思い出して、計画を立てられるようにする。 ・ 挿絵と対応させて場面分けができるようにする。 進んで学習計画を考えたり、全文を音読したりしている。 【観察・ノート】

2次（読み方を習得する過程）	3	・お手紙を悲しみながらもずっと待つがまくと、がまくの悲しみに気付いて自分のことのように落ち込むかえるくんの様子や気持ちを読み取り、音読劇の表し方を工夫することができる。	1. がまくんとかえるくんがしたことを確かめ、課題をつかむ。 お手紙をまつがまくと、それを知ったかえるくんのようすや気持ちをそうぞうし、音読げきのしかたをくふうしよう。 2. 1場面を役割音読し、工夫して音読したいところに線を引く。（一人読み） 3. 音読劇の工夫を交流する。（全体交流） 【深めの発問】 がまくんになって、「ああ、いちども。」を読んでみよう。 4. まとめる。 お手紙をまつがまくんは、かなしくてふしあわせな気持ち。それを見ているかえるくんも、がまくんの気持ちを思うと、かなしくなってしまう。 5. まとめの音読をする。	□かなしい □ふしあわせ □ああ □お手紙なんか □空っぽさ □ふたりとも	・挿絵としたことから、時・場所・人物・出来事を確認する。 ・役割音読や動作化を通して、二人の悲しい気持ちに気付かせる。 がまくんとかえるくんの悲しい気持ちを読み取り、音読や動きに表している。 【ノート・音読】
	4	・かえるくんの行動に着目することを通して、がまくんを喜ばせるために、大急ぎで手紙を書いてかたつむりくんに渡すかえるくんの様子や気持ちを読み取り、音読劇の表し方を工夫することができる。	1. 前時の場面を振り返る。 2. かえるくんのしたことを確かめ、課題をつかむ。 がまくんにお手紙を書くかえるくんのようすや気持ちをそうぞうし、音読げきのしかたをくふうしよう。 3. 2場面を役割音読し、工夫して音読したいところに線を引く。（一人読み） 4. 音読劇の工夫を交流する。（全体交流） 【深めの発問】 かえるくんのしたことをまねしてやってみよう。 5. まとめる。 かえるくんは、がまくんをよるこばせようと、よぶんなことをせず、大いそぎで手紙を書いた。 6. まとめの音読をする。	□大いそぎで □帰りました □見つけました □書きました □入れました □書きました □とび出しました	・したことの描写が連続していることから、急いでいるかえるくんの様子に気付かせる。 がまくんを喜ばせたくて、大急ぎで手紙を書いているかえるくんの様子や気持ちを読み取り、音読や動きに表している。 【ノート・音読】
	5（本時 二年三組）	・二人の挿絵や会話文に着目することを通して、手紙を待つよう励ますかえるくんとすねて投げやりになっているがまくんの対照的な様子に気付き、音読劇の表し方を工夫することができる。	1. 前時の場面を振り返る。 2. がまくんとかえるくんのしたことを確かめ、課題をつかむ。 お昼ねをするがまくと、手紙をまつかえるくんのようすや気持ちをそうぞうし、音読げきのしかたをくふうしよう。 3. 3場面を役割音読し、工夫して音読したいところに線を引く。（一人読み） 4. 音読劇の工夫を交流する。（全体交流） 【深めの発問】 かえるくんになりきって、まどの外を見てみよう。	□お昼ね □見ました □のぞきました □もうちょっと □あきあき □ひょっとして □そんなこと、あるものかい □でもね □きょうは □かもしれないよ □ばからしいこと □きょうだって	・挿絵やしたことの描写から、場面の様子を確認する。 ・役割音読や動作化を通して、投げやりながまくと一生懸命なかえるくん、二人の対照的な様子や気持ちに気付かせる。

	8・9 (本時 二年一組)	・自分が選んだ場面のがまくんとかえるくんの様子や気持ちが表れるように、音読の仕方や動き、表情を工夫して、音読劇の表し方を考えることができる。	1. 課題をつかむ。 がまくんやかえるくんになりきって、音読げきのれんしゅうをしよう。 2. 音読の工夫や動き方を考える。 (一人読み) 3. グループ(がまくん・かえるくん・地の文)で音読劇の練習をする。 【深めの発問】 ～グループの音読げきを見て「なりきっているなあ」と思うところや、「もっとこうするとよい」と思うところを見つけましょう。 4. まとめの音読劇を発表する。	□様子 □気持ち □なりきって	・場面ごとのがまくんとかえるくんの様子や気持ちを確認し、それらが表れるように音読や動きを工夫させる。 自分が選んだ場面のがまくんとかえるくんの様子や気持ちが表れるように、音読の仕方や動き、表情を工夫している。 【発言・音読】
	10	・登場人物になり切って、音読劇を発表したり聞いたりすることができる。	1. 課題をつかむ。 がまくんやかえるくんになりきって、音読げきはっぴょう会をしよう。 2. 音読劇発表会をする。 3. 感想を交流する。	□なりきって	・比べながら見たり発表したりできるようにする。 がまくんやかえるくんになりきって音読や動きを工夫している。 【音読】
3次(読み方を活用して読む過程)	11	・受け取った人がうれしいような内容や書きぶりを考え、手紙を書くことができる。	1. 課題をつかむ。 がまくんやかえるくん、かたつむりくんにうれしいお手紙を書こう。 2. お手紙を書く相手と、内容を考える。 3. うれしいお手紙を書く。 4. グループで読み合う。	□うれしいなる手紙 □はじめ □なか □おわり	・これまでの学習を振り返り、言いたいことを考えられるようにする。 受け取った人がうれしい気持ちになる手紙を書き、読み合い、感想を伝え合っている。 【手紙・発言】
	12	・同じシリーズの本から好きな本を選び、おもしろい所を見つけながら読むことができる。	1. 課題をつかむ。 がまくんとかえるくんシリーズのほかのお話を読んで、楽しもう。 2. 好きな本を選んで読書する。 3. グループで、おもしろかったところを紹介し合う。	□ようす □気持ち □会話文 □したこと	好きな本を選び、人物の様子や気持ちに着目して楽しく読み、面白かったところを伝え合っている。 【音読】